



## 一 宇宙眼がやってきた。やあ、やあ、やあ。

春のある日。宇宙の遙か彼方から、地球に一对の眼がやってきた。眼はは空に浮かび、地球人を眺めた。地上の人々は、空に浮かんだ眼に誰も気付いていない。オフィスビルの会議室で議論を交わしている者、打ち合わせの時間に間に合わないのか、前傾姿勢で息を切らしながら走っている者もいる。

宅急便が急停車した。運転手は座席から飛び降りると、荷台のドアを開き、中から荷物を取り出すとビルに飛び込み、すぐに手ぶらで戻って来ると、別の場所へ移動した。その空いた場所を待っていたかのように、タクシーが停車し、背広姿のサラリーマンが、しかめ面を笑顔に変え、ビルの中に入って行く。みんな、自分のことが精一杯で空を見上げる暇がないのだ。

いや、その空も、乱立し、背伸びを続ける高層ビルの隙間にしかない。また、道路の植栽の木漏れ陽から差し込む光に気付く人もほとんどいない。人間にとって狭小の存在になった空に、ハトやスズメなどが飛び交い、日が落ち、夕刻が迫ると中央通りのクスノキのねぐらに野鳥が群れをなして戻ってくる。そんな空に、宇宙からやって来た眼が漂っていた。

ある男がオフィスビルから飛び出た。黒いカバンを持っている。営業周りだ。ポケットから携帯電話を取り出す。時間を確認する。まだ、大丈夫だ。その時、背中に視線を感じた。誰かに見つめられている。第六感か、それとも、第七感か。立ち止って、周りを見渡す。誰も自分を見ていない。俯いて足早に通り過ぎる人々だけだ。みんな、他人のこと なんか、気にする素振りもない。気のせいだ。気のせいだ。自分で納得する。急がないと。男は歩を進める。

男の眼は歩道のブロックから横断歩道に転じ、赤青黄の信号機に移り、その上の雲を見た。いや、雲じゃない。あんなに輪郭がはっきりとした雲はない。それも黒い。いや輪郭は白い。白の中に黒がある。何だ。男は、何回か、まばたきをした。そして、眼を凝らす。眼だ。眼が空に浮かんでいる。空に浮かんだ一对の眼。男の右眼と空の左眼が、男の左眼と空の右眼が見つめ合った。

その瞬間、空の眼からもう一对の眼が分離した。そう、生まれたのだ。そんな、馬鹿な。男は、眼をつぶり、右手の親指と人差し指で眼頭を押さえる。疲れているんだ。さっきまで、パソコンで営業の資料を作っていた。事務所から急に外に出たので、眼が外の明るさに慣れていないんだ。じきに直る。これまでも直ってきた。

男は、再び、眼を開いた。空を見上げる。信号機は青から赤に変わっていた。その上には、ビルとビルの間に見える青い空がわずかに見える。雲のような眼、眼のような雲はいない。やっぱり、見誤っていたんだ。よかった。男は、もう一度、眼をつぶり、眼がしらを押しえた。

その頃、二組になった眼は、示し合わせたかのように二手に分かれると、街を歩く人々やオフィスの窓から見える人々、小学校、老人ホーム、病院などを訪れては、人々を見つめた。人々が漂う眼と眼が合うと、コピーのように、一組の眼が生まれた。

そうこうするうちに、最初の一組の眼が、かなりの数に増加した。いくら自分以外の世間に無頓着な人々でも、空に浮かぶ眼を眼の当たりにした。だが、まさか、空に眼が浮かんでいるなんて、と、眼の存在は否定した。人々は、眼の疲れから病気だろうと、近所の診療所や総合病院

などに飛び込んだ。医師がいくら精密検査を行っても、人々の眼に異常はなかった。

街中の眼科医師会が集まった。最近、空に眼が見えると言う患者が増えている。パソコンや携帯電話など、電気機器を使用しているため、眼の疲れが原因なのか、それとも、いくらやっても終わらない仕事によるストレスなのか、喧々囂々、侃々諤々などの意見が交わされた。だが、答えはどれも正しくて、どれも誤っているように思われた。ある眼科医が、眼自体に異常があるのではなく、見えた物にこそ問題が隠されているのではないかと進言した。こうした長い議論を経て、ようやく、人々は空に浮かぶ眼を見て、こう叫んだ。

「眼だ。宇宙からやって来た眼だ。宇宙眼だ。やあ、やあ、やあ」

増殖していく宇宙眼。当初、信号機の上の空中に漂っていた一対の宇宙眼は、二対、四対、八対、十六対と、倍々で増加し、右往左往しながら、四方八方、東西南北、街をぐるりと一周していく。眼たちはそれぞれ、地面に這いつくばったり、宙に浮かんだり、木の上や高いビルの上に、学校の校舎の時計の上、屋根の上に留まった。そして、行き交う人々と眼を合わせては、コピーし、増殖した。人々は、増殖する宇宙眼に恐れを抱いた。だが、宇宙眼は、地球に到来した後、ただ、眼を見開いて、人間たちの行動をただ見つめるだけであった。眼が合うと増殖したものの、人々に危害を加えるような行為はしなかった。

それにも関わらず、放送局や新聞などの記者たちが騒ぎに騒いだ。特集番組を編成し、一日中、テレビカメラを回し続け、放映した。新聞は、朝刊、夕刊だけでなく、号外も出し、詳細に、宇宙眼について記事を流した。やや遅ればせながら、雑誌も、週刊誌や月刊誌で、突然現れた宇宙眼に対し、突然現れた宇宙眼の専門家の意見を掲載した。専門家たちの意見は、「宇宙眼の目的は、人類を滅ぼし、人類に変わってこの地球を征服するつもりである」というSF映画のような論調ばかりで、出版社は、宇宙眼が増殖する以上に、雑誌を増刷し、販売し、利益を上げることに血眼になった。

ある学者は、宇宙眼が人間の眼をコピーし、増殖していく現象を分析し、この能力を活用すれば、病気や事故等で失った眼を再生できるのではないかと論じた。それで、宇宙眼に懸賞金がかかけられ、多くの懸賞稼ぎが宇宙眼を捕まえようと街中を奔走した。だが、宇宙眼を捕まえるどころか、かえって、懸賞稼ぎの眼が宇宙眼によってコピーされ、宇宙眼の増殖に寄与するだけであった。

人々は、こぞって、一日中、テレビを点けっぱなしにして、情報を収集しようとした。その情報は、右耳から入り、左耳に抜け、右眼と左眼の両網膜に映った映像は、瞬間的に消えた。次から次へととめどなく新しい情報が入力されるため、保存しておく必要がないからだ。また、記憶媒体も情報を保存しようにも限界があった。そう、頭がパンクしそうで、以前の情報に惑わされて、身動きができなくなったのだ。それならば、行く川の流れのように、情報も流して行った方が効率的ではないかと思った。早速、やってみると、こんな便利な事はない。外部記憶は、テレビや新聞などに任せ、人々は、瞬間的な事象に一喜一憂することで、自分を取り戻した。

突撃レポーターは、突撃カメラマンと同行し、アポイントを取らず、公園や道路など、あちらこちらに点在する宇宙眼に突然マイクを向け、「宇宙眼さんたち。あなた方の目的は何ですか」と尋ねるものの、宇宙眼は、相変わらず、眼を大きく見開いたままで、何も語らなかった。いや

、語る口を持っていなかった。

レポーターは宇宙眼からのコメントをもらえなかった代わりに、自分の眼をコピーしてもらい、レポーターにそっくりの宇宙眼がこの世に誕生した。その眼を見て、気持ち悪がるレポーターもいたし、子どものいないレポーターは自分のDNAが宇宙人にまで継承された、と喜ぶ人もいた。一喜一憂である。

この様子がテレビで放映されると、家族からも縁を切られ、友人との付き合いもなく、1LDKの部屋に引きこもりがちであった人たちが、「そうだ、そうだ、全くだ」と、こぞって宇宙眼に会いに出かけ、自らの眼をコピーしてもらい、自分そっくりの宇宙眼が生まれることに喜びを感じた。そう、もう一人じゃないんだ。

眼をコピーされた者の中には、自分の名前が耕一なので、コピー眼に耕二と名付け、役所に出生届を提出しようとした。また、資産家だが、相続人のいない老婆は、コピー眼に土地や家などの莫大な資産を相続しようとした。だが、そんな人間の勝手な気持ちを知ってか知らないのか、コピーされた眼は、原本である人間には全く興味がないのか、子どもが巣立つように、コピー先である新たな原本を求めて旅立つのであった。

宇宙眼が出現した際、ほとんどの人々が宇宙眼にコピーされるのを恐れて、ビルや校舎の奥に逃げ込んだり、地下室に閉じ籠った。隠れた人々は、部屋の中で、テレビや新聞などで、宇宙眼の消息に気を配りながらも、普段、家族が揃うことが少ないので、ここぞとばかりに、トランプやカルタ、人生ゲームやカラオケなどの遊びを家族と一緒に興じた。おかげで、バラバラに崩壊寸前だった家族に絆が生まれ、輪が広がった。宇宙眼のおかげだ。仏壇や神棚に、宇宙眼の写真を奉納し、毎日一回、五体倒地で、お祈りをする者もあらわれた。

また、宇宙眼を信仰の対象とし、宇宙眼の許可もえずに、勝手に写真を撮影し、教祖とし、宇宙眼開眼教と名乗る集団も現れた。しかし、地下組織の集団なので、宇宙眼から著作権違反のおとがめは受けなかった。

地下に潜んだ人々の中には、家族団欒に終始するだけでは満足できない人々もいた。勇猛果敢にも、純粋な好奇心から、マスコミ関係の仕事ではないにも関わらず、地下室を抜けだし、表に出た。出た瞬間、宇宙眼に出会った。思わず、会釈をする。だが、宇宙眼は眼を開いたままで、何の応対もしてくれなかった。ただ、眼をコピーするだけであつた。

男は、「ちえっ、冷たい奴だ。学校や家で、挨拶することを教えてもらえなかったのか」と憤慨する。だが、相変わらず、宇宙眼は、男を見つめたままだった。好奇心の塊は、街の中を巡り巡った。好奇心の塊は、単数形ではなく、複数形であつた。次々とマンホールが開き、下水管から、地下に隠れていた人々が顔を覗か、街の様子を窺った。

人々は、街中を散策した。街中の至る所に、宇宙眼が壁や木の葉などにひっついていて、宇宙眼たちは、相変わらず眼を見開いたままで、眼の前を通る人間たちをただ、黙った、そう、口がないので、ただ、黙って、見過ごすだけであつた。黙ったまま、不意打ちではないけれど、人々の眼をコピーした。

街の人々は、宇宙眼が人々に対して攻撃的ではないので、ようやく安心した。このことは、再び、テレビや新聞、インターネットを通じて、街中に広く知れ渡った。好奇心の塊の跳ね返り

の輩から、一步後を歩く、やや先進的な輩が地下室を抜け出た。次に、常識的な人々が地上に戻り、普通の生活を行った。

取り残されたのは、石橋を叩きつぶす保守的な人々だったが、自分たちが少数で、地上に人々が普段通り、愉快地、快適に、何の恐れもなくおてんと様の下で暮らしているのをテレビなどで観ると、ようやく腰にぶら下げた頑なな意地を捨てて、それでも、おそろおそろと地上の生活に戻っていった。

地上には、元の通り、街の人々の暮らしが戻った。異なっているのは、信号や電信柱、植栽、ビルの壁、道路の表面などに、宇宙眼が存在することであった。それもいつかは慣れ、人々は、会社や学校に行ったり、バスやトラックに乗ったり、スーパーやコンビニなどのお店に買い物に行った。非日常が日常に飲み込まれたしゅんかんだった。

人々は、最初、普段通りの生活をしながら、宇宙眼たちに常に見張られているようで、気持ち悪かったが、子どもたちは、何の気にせず、街中で遊んでいた。

子どもたちの中には、木に登り、眼の前で宇宙眼を観察した。宇宙眼は、まばたきもせずに、じっと子どもたちを見つめた。

「宇宙眼さん、宇宙眼さん、笑っちゃだめよ、あっぷっぷ」とにらめっこに興じる子どもたちもいた。だが、「あっはっはっは」と笑って負けるのは、いつも子どもたちの方だった。大人たちは、宇宙眼が何をするわけではなかったものの、何となく居心地が悪く、行動が慎重になった。

車は、黄信号なのに交差点に突っ込むことは少なくなり、スーパーやコンビニでも万引きが減少した。会社や学校などでのイジメも少なくなった。バカ話に興じていた者たちも、宇宙眼が見えると、すぐに知的な会話に代え、地球人の印象をよくしようと努めた。宇宙眼の純粹無垢なまなざしが、人の行動に少なからずよい影響を与えたのだ。

治安維持当局は、この事実を知り、宇宙眼たちに、「見守りボランティア隊」の名誉を与えようとしたが、宇宙眼たちは、「はい」とも「いいえ」とも言わず、ただ、じっと、黙って（口がないからしゃべりようがないが）見つめ返すだけであった。折角、任命書を持ってきた治安維持当局の係員は、あきらめて、その場から立ち去った。

当分の間、宇宙眼たちは、街で生活した。生活したと言っても、何をするわけでもなく、ただ、眼を見開いているだけではあった。街の人々は、宇宙眼との共存生活が長くなるに従って、以前は、宇宙眼に見つめられているようで、何かと行動にも制約があったが、宇宙眼に見つめられることに慣れてしまい、宇宙眼の来襲前と同じように勝手な振る舞いをするようになった。

黄色の信号で交差点に車が飛び込んだり、お店の従業員やガードマンなどが見ていないと、ポケットに商品をねじ込んだり、道路にタバコの吸い殻を平気で撒き散らしたり、通りすがりに、近所の家に咲いているの花を手折って、持ち帰ったりするなど、自己の欲望のままに行動した。非日常が日常に飲み込まれた瞬間だった。そんな街の人々の様子を宇宙眼たちは、眼を大きく見開いたまま、ただ、黙って見つめているだけであった。

宇宙眼たちは、街の人々の眼を全てコピーし終えたのか、一番最初に街に飛んできた眼が眼配せをすると、一斉に、空に舞い上がった。空一面の、め、メ、ME、宇宙眼。この景色を美しい

と思うか、おぞましいと思うか、人それぞれである。

宇宙眼たちが、別れを惜しむかのようにパチクリ、ぱちくりとまばたきをした。多分、コピーした原本である人々にそれぞれが別れのあいさつをしているのだろう。だが、そのささやかなまばたきを閉じる行為が強風を巻き起こし、屋外で活動していた人々はビルや学校、市庁舎、デパート、地下街に逃げ込まざるを得なかった。まばたきも多数になれば暴風になるし、よかれと思ってやった行為が、結果として、他人に迷惑な行為になることがあるのだ。

空に浮かぶ対になった宇宙眼たち。ひと通りまばたきが終わると一斉に空高く、雲の上、大気圏、宇宙へと飛び去った。

宇宙眼が去った後、あれほど、宇宙眼が来襲した時に、騒ぎに騒いだマスコミも、今は、何の関心も示さなかった。ケーブルテレビ局のアナウンサーが、公園で遊ぶ幼児や母親たちに、宇宙眼がいなくなってどうですか、というインタビューが放映されるのみであった。インタビューを受けた母親たちは、

「気持ち悪い眼がいなくなってよかったです」

「でも、宇宙眼が悪い人をなんとなく見張ってくれていたようで、いてくれた方が良かったように気がします」

様々な意見だった。その放送は、定期的に地域の話題のニュースとして繰り返し放送されたが、視聴率は上がらず、テレビを点けっぱなしにしても、まばたきをしている間に番組が終わっていたので、人々の話題にならなかった。

宇宙眼が飛び去った後、乱立するビルの間隙から、青空が見え、地面には光が差すなど、日常が非日常になり、時とともに、非が陽によって、日常に焼き付けられた。

## 二 宇宙鼻がやってきた。やあ、やあ、やあ。

青空と黒い雲が交代で現れた後、季節は夏になった。ある日、ひとつの小さな影が街の中央通りに現れた。洋ナシのような形だった。中央通りにはクスノキは植えているが、ナシノキなんてなし。別の通りには、この街がみかんの産地であり、霊場周りのお遍路さんが歩くこともあって、ナシノキじゃなく、みかんの木が植えられていた。クスノキにはみかんの実はならぬ。当り前だ。もちろんナシも無しだ。じゃあなんだ。

影の先を見上げる。見上げた先は太陽だ。光輝く太陽はまぶしくて、下敷きなしでは、直接見られない。そう言えば、春にいた宇宙眼たちは、必ず、背中を太陽に向け、眼は地面を見ていた。さすが宇宙眼だ。直接、太陽を見ようとはしない。生きて行く知恵なのかもしれない。

宇宙眼の話はよそう。今は、謎の洋ナシの影だ影と太陽を結ぶ一直線上に影の本体があった。こんな時期にナシだなんて。そう、今は夏だ。夏にナシだなんて、本当に無しだ。しかも洋ナシだ。ここは日本だ。二十世紀ナシか、長十郎ナシにして欲しい。

だが、照りつける太陽の光に汗が噴き出て、喉が渇き、水が飲みたくなる。そんな切羽詰まった状況だ。影がナシに見えても止むえなしだ。街を歩いていた老婆が影の先を見た。影をなしに見誤る原因は、あのキラキラと照りつける太陽のせいだ。自分の脳ミソも沸騰しそうだ。雲ひとつない空には、太陽はひとつしかないけれど、老婆にはまぶしい光が幾千、幾万の数に見える。

老婆は、眼を開けていられないけれど、ナシのような影の存在を確かめたかった。いや、本当は、手が届くならばナシをもぎとり、この喉の渇きを癒したかったのだ。皺の重みで三分の二が閉じられた瞼を思いが重いを上回って持ち上げる。

あばばい。まぶしいという意味だ。老婆がまだ幼女の頃、ちょうちょうを捕まえようと、網を持って追いかけていた。自分の頭の上にはちょうちょうが舞っている。黄色いもんしろちょうちょうだった、空に黄色が乱舞する。あばばい。幼女が叫んだ。幼女は幼すぎて、まだ、まぶしいという言葉が知らなかった。咄嗟に出た言葉が、あばばいだった。空には、黄色い天使を見守るかのように、太陽の光がさんさんと輝く。空一面が金色の折り紙だ。幼女が眼を閉じた。しかし、幼女の網膜には、金色の折り紙が映っている。その紙で折られたちょうちょう。

それ以来、幼女が成長し、今となっては年老いた女は、まぶしい時、あばばいという言葉が口から自然と出る。あばばい＝まぶしい。この言葉が、一見、イコールで結ばれない、幼女と老婆を結び付ける証拠でもあった。あばばいという言葉が、タイムマシンとなって、いつまでも老婆の心に、金色のちょうちょうを飛ばすのだ。

その、あばばい幼女が成長し、老いたあばばい老女が口ごもった。あれ、鼻？老女は、何回も眼をしばたたかせる。最近特に、眼がかすむ。五十歳代からは、緑内障を患い、毎日のように眼圧を抑制する眼薬を差している。空に、鼻が浮かぶだなんて。これは、眼のせいじゃなく、頭のせいじゃないか。そう、ボケ、認知症が始まっているんじゃないか。

そう言えば、家を出る時、テレビや部屋の電気をちゃんと消したかどうかははっきりと覚えていないことが多い。玄関のドアも鍵を閉めたのだろうか。あれこれと思いを巡らせれば巡らすほど、不安が募っていく。不安の預貯金残高ばかりが増え、更に利子もつく。悪循環だ。不安を消し

去るには、認知しかないと思う老婆の毎日である。

老女は、もう一度、眼を閉じた。真っ暗だ。金色のちょうちょうは飛んでいない。よし。大丈夫。老女は意を決して、まぶたを開ける。瞳が見た物は、やはり鼻だった。信号機が青にも関わらず、老女は動かない。いや、動けない。信号機の上に漂う鼻が、突然、老女の下に舞い降りてきた。どこからどう見ても鼻である。洋ナシの幻影ではない。老女は後悔した。あの時、喉が渴いたなんて思わなかったよかったのだ。そうすれば、洋ナシもどきの影に気が付かずに済んだのに。でも、それは済んだこと。今さら後悔しても仕方がないことなのだ。

空中に浮かぶ鼻は老女の顔の前にあった。老女は顔を伏せた。この年齢で、鼻とお見合いだなんて、気恥ずかしい。夫は二十年前に亡くなった。もうすぐ、二人で過ごした時間よりもひとりでの生活の日々の方が長くなる。子どもたちは巣立ち、近所に住んでいるが、家を訪れるのは二週間に一回くらい。回数が多いのか、少ないのかわからないけれど、今の老女にとっては、適当な回数である。

もう少し年齢を重ね、体が動きづらくなったら、一週間に一回、いや、二回、三回と家に来て欲しい気もする。そんなことよりも、今は、鼻だ。眼の前の鼻だ。一体、誰の鼻なんだ。交通事故で吹き飛ばされた鼻なのか。辺りを見回すけれど、パトカーも救急車の姿も見えない。野次馬がたかっている様子もない。やはり、鼻は鼻として、独立して生きている。

自らのことを振り返る。自分には、鼻も眼も口も耳もある。今、眼の前の空中に漂う鼻にも、やはり鼻や眼や口や耳があるのか。じっと見るが、歳とともに衰えて来ている自分の眼では、はっきりとわからない。だが、やはり、鼻は鼻として鼻である。

老女の眼の前の鼻が動いた。老女の頭、肩、お腹、足、お尻、背中などを漂っている。よく見ると、鼻の穴が小さくすぼんだり大きく広がったりしている。まるで、臭いを嗅いでいるみたいだ。

恥ずかしい。老女は思う。この歳になって、体の臭いをかがれるなんて。加齢臭。その言葉が思い浮かんだ。自分には臭わないけれど、他人には不快な気持ちにさせる臭い。それが歳とともに加わるなんて。だが、ある意味では、この加齢臭は、木の年輪と同じではないか。年をとることは素晴らしいこともある。この歳まで生きて来て、様々な臭いの食べ物を食べ、様々な臭いをかぎ、様々な臭いを身に付けたのだ。加齢臭は生きてきた証なのだ。もし、臭いが地層や年輪のように積み重ねられるものならば、それを誇りに思うべきなのだ。

もう、何も恥ずかしくない。長生きが誇れることならば、加齢臭だって自慢だ。加齢臭が出るくらい長生きしてみると、若い奴らに言いたい。生きようとして生きられなかった者たちを、この年老いた眼は見てきたのだ。この年老いた鼻は匂ってきたのだ、この耳は聞いてきたのだ。この口はしゃべり続けてきたのだ。どうだ。他人には、ざまを見るじゃなく、自分の生き様を見せてやる。眼の前の、漂う鼻にも。

老女は意気揚々と顔を上げ、胸を張り、背筋を伸ばし、足は大地をしっかりと踏ん張った。

その頃、空中に浮かんだ鼻は、老女の体を周遊・旋回すると、老女の顔の前に再び現れ、最後に、老女の鼻を匂った。その途端、鼻は二つに分かれた。老女の眼の前には、これまで漂っていた鼻と、老女の鼻と洋ナシふたつ（瓜ふたつとも言う）の鼻が浮かんでいた。



さて、老女から分かれた鼻たちのうち、ひとつの鼻が、香ばしい匂いに誘われてか、たこ焼き屋の前に行く。たこ焼き屋では、店長が、焼き上がったたこやきをくるくると回転させている。たこやき機の上に、ひとつの影が差した。お客さんだ。

「いらっしやい」店長が、あいそよく声を出す。店長といっても、自営業だから、オーナー兼店長兼従業員だ。忙しい時には、たまに、妻が手伝ってくれるが、妻もパートで働いているため、原則、自分一人だ。元気よくあいその声を出したが、相手からの返事はない。いつもなら、たこやき三百円分とか、五百円分とか、しょうゆ味にしてとか、しょうゆ味とソース味を半分ずつでお願い、など様々な注文があるはずなのに、今日のお客さんは、黙ったままだ。

店長が顔を上げた。眼の前に鼻がいた。鼻だけがあった。見間違いかと思った。店長は、もう一度、たこ焼き機の方に眼を移した。一日中、たこ焼きばかり焼いていると、全ての物がたこ焼きのように見えてしまうのだ。幻覚だ。間違いはない。厳格に幻覚だ。

確か、先日も同じようなことがあった。お客さんの足の流れが止まり、一息つこうと、店の片隅の座り、雑誌を手を取った。いきなり、たこやきの絵が出てきた。いかん、いかん。眼がたこやきに毒されているぞ。他の雑誌に手を伸ばす。その雑誌の表紙もたこやきの絵に見えた。どれもこれも、たこ焼きか。自分の網膜にたこ焼きが焼き付いて離れなくなっているのか。

店長は、再度、眼をつぶり、いちからじゅうまで数を数える。そして、眼を開けた。やはり、雑誌の表紙はたこやきの絵だ。そこに、「パパ、ただいま」と、長男が返って来た。保育所から帰って来たのだ。「ただいま」妻も返って来た。パートの仕事を終え、長男を保育所に迎えに行っていたのだ。もう、そんな時間なのか。時計を見る。夕方の五時だ。帰宅途中のサラリーマンや学生たち、夕食の準備をする主婦たちが増えて来て、店はこれからが一日で一番忙しくなる時間なのだ。稼ぎ時なのだ。それなのに、俺の眼は既に疲れ切っている。

長男は、店の中に飛び込んで来ると、店長が持っていた絵本を手に取り、ページをめくり始めた。「たこやきマントマン、かっこいいんだ」そこで、店長は初めて、その雑誌が絵本で、たこやきをヒーローにしたマンガであることに気付いたのだった。

いかん、いかん。お客さんをたこ焼きに見えてしまうなんて。いや、待てよ。店長は思い直した。眼の前にあるのは、たこ焼きじゃなくて、鼻だったはずだ、こんなことは初めてだ。もう一度、顔を上げた。店長の眼に見えたのはやはり鼻だった。鼻だけが存在するのか。鼻男なのか。眼も耳も口もない。鼻だけだ。そんなことは、ありえない。いや、現実問題として、眼の前に有り得る。

ひょっとすると、鼻男は、透明人間なのかもしれない。それなら、理由が見つく。鼻男は、どこかの科学者で、体全身を消す薬品を開発したのだろう。それを確かめるために、こうして、自分の所に来て、たこ焼きを買おうとしているのだ。だが、何故、鼻だけが見えているのか。悪霊から逃れるために体全身にお経を書いてももらったにも関わらず、耳だけはお経を書き忘れられた男がいたように、この鼻男の科学者も、鼻だけ透明になる薬を塗り忘れたのだろうか。いや、そんなことはあり得ない。自分だって、透明人間になる薬を発明したら、全身に塗った後、必ず鏡で確認するはずだ。鼻男の科学者も確認しただろう。すると、鼻だけが見えていることに気付くはずだ。じゃあ、何故、鼻だけ塗り忘れたのだろうか。

全身が見えなくなったまま、買い物に行ったら、相手が驚くかも知れない。そこで、鼻だけをわざと薬を塗らずにいるのだろうか。そうだ。科学者のささやかな自己主張なのだ。

店長はそう納得した。鼻だけの生き物が存在するよりも、透明人間が存在する方が、理にかなっていると思ったのだ。

店長は、相手の見えない眼じゃなくて、見える鼻に向かって、もう一度、声を掛けた。

「いらっしゃいませ。何にしましょうか」だが、鼻男は返事をしない。鼻男はタコ焼きの香ばしい匂いを嗅がずに、店長の頭から首、胸、お腹、ふともも、足先まで、舐めまわすように、匂い回した。鼻男が店長の体全身を臭う際、体には少しも触れなかった。店長は、ここでようやく悟った。この鼻男は透明人間ではない。鼻だけで存在する鼻男なのだ。

そう言えば、以前、この街に宇宙眼がやって来たことがあった。そうか、この鼻男も、宇宙眼の仲間かもしれない。それならば、この鼻男は、宇宙鼻なのだ。そう思うと、全ての謎が解けた。だいたい、透明人間が存在するなんてこと自体があり得ないのだ。鼻だけの生物が存在することも信じられないが、宇宙眼がいた以上。宇宙鼻がいたって不思議じゃない。

宇宙鼻か。いいネーミングだ。店長は、自分の体を匂い回す宇宙鼻をまじまじと見つめる。宇宙鼻はひととおり、店長を匂い尽くしたのか、再び、店長の顔の前に現れた。宇宙鼻はすうと息を吸い込むと二つに分かれた。宇宙鼻がふたつになった。店長は鼻をふくらませ、眼を点にし、ぽっかりと口を開け、耳たぶを両手でつまんだ。つまり、びっくりしたのだ。

宇宙鼻たちは、お時儀かどうかはわからないけれど、鼻を下げ、別々の方向へ漂って行った。店長は二手に分かれて飛んで行く鼻たちの後ろ姿を見つめながら、ふと我に返った。急いで、店の片隅に掛かっている鏡を見た。

「大丈夫だ」店長は自分の鼻を撫でながら、宇宙鼻に自分の鼻がもぎりとられていないのを確認し、安心した。

だが、待てよ。あの鼻、俺の鼻に似ていたな。普段、鏡で自分の顔をまじまじとみることはない。飲食の仕事をしているので、髪が乱れていないとか、口に涎がついていないだとか、身だしなみ程度に鏡を見ることはあっても、自分の鼻や眼、口、耳の形を観察することはない。たまに、左眼を閉じて、はい、左斜め下を見てと、右眼で右鼻部分を見たり、右眼を閉じて、はい、右斜め下を見て、左眼で左鼻部分を見るくらいである。

それくらい、たまにしか自分の顔を見ないたこ焼き屋の店長でさえ、今、眼の前の、宇宙鼻から分裂新規となった宇宙鼻が自分の鼻に似ていると感じた。いや、似ているんじゃない、そっくりだった。体を臭っただけで、コピー鼻を生み出す宇宙鼻。恐るべき力だ。

だが、それがどうした。俺だって、たこ焼き焼くこと十数年。当初は、小麦粉やたこなど、材料は全て計量器で測っていたが、今は目分量で、最高のたこやきの黄金比をつくりだすことができる。黄金比だけでない。たこ焼きの焼き具合だって、見なくても、匂いだけで、黄金比の焦げ目がわかる。どうだ。宇宙鼻。お前には負けないぞ。ささやかな自己主張をする店長であった。

たこ焼き屋の店長が虚空を見つめている間に、宇宙鼻たちは、パン屋やカフェ、コンビニ、スーパーなどを飛行し、次々と分裂していった。その数は、十、百、千以上だ。ひと鼻だけであった時には、老婆以外に誰も気づかなかったが、千を超える鼻が、店の窓ガラスに引っついてい

たり、空中を漂っていたり、中央通りのクスノキの枝に止まっていると、嫌でも目立たざるを得ない。

警察や消防署、市役所に、気持ちが悪い、何とかしてくれ、異常発生だ、と苦情の電話が殺到したが、宇宙鼻は、確かに、人間の体を臭うものの、触れることはないし、ただ、分裂するだけで、人間に危害は加えない以上、どうすることもできない。人の鼻をかってにコピーするのは、著作権上、違法ではないかという意見もあったが、コピーされた鼻が、本当にそっくりそのままかという断言はできない。まして、その鼻を販売するなど、商売として利用しているわけではない。相手は、宇宙人（鼻）である。地球人が作った法律が適用されるのかという意見も出た。

それならば、宇宙法で取り締まれないかと議論されたが、宇宙法そのものがあるのかどうか、また、よしんば、宇宙法があったとしても、所有者の承諾なしに勝手にコピーしてはならない、と規定されているかどうかは定かでない。結局、会議は踊る馬鹿りである。

この匂いを嗅ぎつけたのがマスコミである。いつも自分たちは蚊帳の外にいるような顔をして、他人のあらをことさら大きく凶弾する習性を最大限に活用し、行政の体たらくを取り上げるとともに、直接、宇宙鼻に独占インタビューを申し込んだ。申し込んだと言っても、街中に漂っている鼻にカメラとマイクを向けるだけで、いつものように相手の承諾を得ることはしない。神の手先であるマイクとカメラを向ければ、相手は後光が差したと勘違いしてひれ伏すと勝手に思い込んでいるのだ。もちろん、この思い込みは先輩から後輩へと引き継がれ、長年培われた伝統、伝説になっている。

だが、この大きな勘違いは、宇宙鼻には当然通じなかった。「あなたたちの真の眼的は何ですか？」マイクが無遠慮に鼻の前に突き出される。カメラマンが宇宙鼻を画面一杯にアップする。その後ろで、放送会社への入社を希望しているアルバイト学生がライトを照らす。独占インタビューのお膳立ては整った。後は、宇宙鼻の一言を待つのみだ。

「ふん」宇宙鼻がしゃべった。いや、しゃべったと言うよりも、息をしただけだ。ひょっとしたら、人間は、他の生物の種を絶滅させただけでなく、地球までも破滅せんとばかりに増殖した自分たちのことを棚に上げ、たかが、宇宙鼻が増殖していることにあたふたしている人間たちを鼻先で笑ったのかもしれない。

「宇宙鼻は何も語りません。この不気味な存在の宇宙鼻に我々人間はどう対応していくのでしょうか」取材記者からは、不透明な未来をより一層黒く塗りつぶすようなコメントが発せられた。

このニュースが流れた途端、人々は地下にこぞって隠れた。宇宙鼻に匂いを嗅がれた者は一週間以内に死ぬ、という都市伝説が沸き起こったからだ。九十歳を超えたお年寄りから生まれたての赤ちゃんまで、多くの人々が、デパートの食料品売り場の地下や地下鉄の待合室、地下街などに逃げ込んだ。

おかげで、デパ地下の売り上げがこれまでの倍以上になり、宇宙鼻様様だと、食料品売り場の部長はテレビに映る宇宙鼻に感謝しながらも、そのことを口に出せば、人々から火事場泥棒ならぬ、不幸成金と責められやしないかと、本当に困ったものですと苦虫をかみつぶしたような顔

をするために、わざと、自分の舌を歯で噛みしめた。

デパチカにはますます人が集まって来て、溢れ返るようになった。行き場がない人々は、デパチカで夜を過ごそうとした。デパート側としては、店の終業時間が終わったのに、いつまでもお客さんがいたのでは、店の管理もできず、また、管理しようとするれば、従業員の勤務時間外手当も増加することから、社長からは「今すぐ、お客さんにデパートから帰ってもらいなさい」との指示があった。

だが、今、デパチカにいるのは、帰る場所のない人々だ。こうした人々を終業時間だからと言って追い出せば、デパートが非難されるのはわかっている。食品部長は、宇宙鼻難民を追い出すべきではない。せめて地下デパだけでも、二十四時間営業にすべきだと、社長を始め、取締役たちに直訴した。

役員による御前会議が開催された。食品部長は、円卓の会議室の外の廊下で、端から端まで何回も往復した。会議は何時間も続いた。会議室の中は踊りが披露され、その外では健康ウォークが続けられた。健康のバロメータとしてポケットに入れてある部長の万歩計が、一日の眼標である一万歩を越えた。歩数を確認すると、一万歩達成！と、思わずガッツポーズをする食品部長。張り詰めた糸がビブラートするほど、緊張に包まれた雰囲気の中で、食品部長は、ささやかな生の喜びに浸るのであった。

その時、議論が伯仲して騒がしかった会議室が急に静かになり、ドアがゆっくりと開いた。「部長。君の言うとおり、当分の間、デパ地下は二十四時間営業にして、宇宙鼻難民の方々を受け入れることにするよ。君の熱意には負けたよ」

社長からの直々の言葉だった。部長はガッツポーズの手を更に頭上に上げた。部長の様子を見た社長は、「君はこの結果を知っていたのかね」と尋ねた。部長は、まさか1万歩達成で喜んでいるとは言えず、手を握りしめて、「宇宙鼻難民の方々の幸せを祈っていたんです」と当意即妙に答えた。

「そうか。それは素晴らしいことだ。早速、デパ地下にいる宇宙鼻難民の方々に、わが社の方針を伝えてくれ」

社長はそう言い終わると、今後の二十四時間体制に伴う人員の配置計画について検討するからと言って、再び、円卓会議に戻った。

十階から地下まで、既に運転が休止しているエスカレーターを走り降りる部長。これで宇宙鼻難民を救えるし、万歩計の歩数が二万歩まで達成できるぞと、喜んだ。喜びは、一つよりも二つの方がよい。

デパ地下に到着した部長は、食品売り場のアナウンスのマイクを強く握んだ。「皆さん。このデパ地下は、ただ今から二十四時間営業になりました。自宅に帰られない方も、どうぞ、ゆっくりと滞在してください」

放送が終わると、一人の客が拍手を始め、それが二人、三人、十人、百人と増え、デパチカの五段に積み重ねられたお菓子箱が崩れんばかりの大音響となった。食品部長の眼にはうっすらと水のカーテンが降ろされた。また、鼻の奥の水源地から水が勢いよく流れ出ようとしたので、慌てて、ティッシュペーパー製のダムを穴に突っ込んだ。おかで、何とか、洪水は防ぐことはで

きた。水が紙にじんできていくように、部長の心も達成感で満たされていった。

食品売り場は宇宙鼻難民で一杯であった。人々は、朝に、昼に、夕にと、弁当やお茶、バナナやみかん、缶詰めなどの食料品を購入した。売り上げは二倍、三倍、十倍と増加した。部長の決断が会社に利益を与えた。何事も、決める時には決めなければならない。宇宙鼻様様である。

ここで部長は考えた。宇宙鼻に敬意を表すべきであると。人々は宇宙鼻を恐れて、デパチカに避難し、おかげでデパチカが儲かったのである。宇宙鼻に感謝しなければならない。そこで思いついたのが、宇宙鼻の写真を撮影し、神棚に奉納するのである。だが、宇宙鼻の写真を神棚に飾ることは、若干の抵抗があった。この国の八百万の神が。宇宙鼻を神として認めるかどうかである。

だが、部長は発想を変えた。八百万の神である。それが八百万一になろうと気にはしないのではないか。それに、八百万の神の内、大陸からこの島国を訪れた神もいるであろう。それならば、宇宙からやってきた宇宙鼻を神として崇めてもいいのではないか。元々、神を信仰するようになったのも、自分以外の物、者に対して敬意を表する、恐れをなす、自分の卑小さを知り、傲慢不遜な心を戒めるために、崇めるようになったはずだ。それならば、宇宙鼻を神として讃えてもいいのではないか。心にそう決めた。決めた以上、実行する。そして、見事、実行したのであった。

それ以来、食品部長は、朝、昼、晩と一日三回、食料品売り場の裏の商品置き場に回ると、片隅にある神棚に手を合わせた。もちろん、この神棚の裏側には、食料品部長が、相手を死に至らすために匂いを嗅ぐと言う宇宙鼻の風評をものともせず、ひそかに地上に出て、宇宙鼻の被写体をカメラに収めたものだった。

食品部長は、その時の事を思い出した。

この扉の向こうには宇宙鼻がいるはずだ。ゆっくりと扉を押す部長。今は明け方。食品売り場では多くの人が雑魚寝している。その隙間をつま先立ちで前進した。慣れないつま先立ちのため、足元がふらふらする。ふくらはぎがこわばる。顔もこわばる。アキレス腱がぶるぶると震えている。だが、何とか、前線を乗り切った。階段の最上段の踊り場に到着。東の空に太陽はまだ出ていない。だが、うっすらと明るくなっている。暗闇の黒い粒が空気中に溶け込んで、透明になってきているのだ。溶け込んだ黒い粒は拡散し、眼には見えないけれど、日が落ちれば、再び、粒子化し、夜の闇を形成する。

部長の眼には、半分以上の粒子が消えたかのように見えた。眼を凝らす。手にはカメラを持っている。電源を入れた。ジーという音とともに、機械仕掛けの眼が飛び出て、まぶたを広げた。よし、これで準備万端。巷の噂では、宇宙鼻に臭われると、自分の鼻そっくりの鼻が分裂して生まれるらしい。その宇宙鼻が生まれるや否や、元の間人は命をなくしてしまうのだそうだ。だが、それはあくまでも噂だ。死んだ人間は聞いたことがない。もちろん、死んだ人間からは話は聞けない。

もしも、万が一、得てして、そんな馬鹿な、で事実だったら、大変だ。宇宙鼻に臭われて死んだなんて、不名誉以外の何者でもない。自分には妻はいるし、子どもも二人いる。子どもは、高

校三年生と中学三年生だ。今年、それぞれ大学受験と高校受験が控えている。それに合わせ、入試を目指し、塾の費用が大幅にアップした。これから、子どもたちのために、一生懸命、働かなければならない。

そんな時、命を掛けてまで、宇宙鼻の写真を撮影しないといけないのか。自問自答を繰り返す部長。できるだけ、宇宙鼻には近づきたくない。だが、宇宙鼻の写真は撮影したい。部長は、このアンビバレンツな気持ちをアウフヘーベンさせ、夜明け前に、宇宙鼻の撮影を敢行したのだった。

この時間帯なら、宇宙鼻も眠っているだろう。部長は眼を凝らし、写真対象を探す。だが、よく考えてみると、宇宙鼻は眠るのか。いや、宇宙鼻も生物だ。眠らないと生きていけないはずだ。じゃあ、いつ眠るのか。夜行性なのかもしれない。だが、人間の鼻をコピーするのが特性であるならば、その行動形態は人間と同じように、夜寝て朝起きるのではないか。もちろん、夜行性の人間の生活パターンと同様に、夜行性の宇宙鼻もいるだろう。だが、それは例外のはずだ。ほとんどの宇宙鼻は、夜が明けるまでは眠って、日の出とともに目を覚ますのではないか。あくまで、推測だが、今こそ、チャンスのはずだ。部長は自分の体がすり抜けれる程度にドアを開け、そっと外を窺う。

辺りを見回す。誰もいない。宇宙鼻はどこだ。眼の玉を右に左に、上に下に動かす。ぐるりと三百六十度回転させた。宇宙鼻はやっぱりいない。眼が左方向を向いた時だ。何かの物体が視野を遮った。まさかか。そう、まさかだ。宇宙鼻がちょうど眼の高さのドアの位置にひっついていて、鼻の穴から息が出たり入ったりしている。すやすやと眠っているようだ。ゆっくりとドアを閉める。こいつにしよう。あんまり外をうろうろすると他の宇宙鼻に見つかってしまう。今なら、写真を撮れる。カメラを向ける。レンズ越しに宇宙鼻が見えた。今だ、チャンスだ、シャッターだ。ボタンを押した。眼が覚めるといけないので、フラッシュはたかない。

カシャ。撮影完了。宇宙鼻が写っているかどうかを確認する。こういう時、デジタルカメラは早い。折角、命がちじむ思いで撮影に臨んだのに、写真が撮れていなかったら、命がちじんだだけ損したことになる。おっ、映っている。確認できた。早速、事務所に戻ってパソコンにデータを入力し、プリンターで打ち出し、神棚に飾れば終了だ。電源ボタンをオフにして、カメラを握りしめた。

ドアを開ける。ふと、ドアを見た。ドアには宇宙鼻がひっついていない。いやな予感。的中だ。宇宙鼻が、カメラを持っている右手を臭っている。臭われた。部長の頭の中は真っ白になった。思考停止状態。何も考えられない。だが、次の行動のために、考えなければならない。死ぬしかないのか。いやそんなことはない。頭の中の白い黒板に次々と様々な思い出が書かれていく。

小学校に入学した時のこと、中学校の卒業式のこと、このデパートに入社した時のこと、同じ職場だった妻との結婚、長男の出産、次男の誕生、家族旅行、食品部長に昇任したことなど、だ。行動につながらない思いのたけがつぶやかれた後、ようやく、行動につながる思考が湧いてきた。

逃げなきゃ。その間にも、宇宙鼻は、部長の体全身を臭い尽くしていた。眼を見据える。その眼の前に宇宙鼻が立ちはだかった。宇宙鼻は体(?)を二度身震いすると、二つに分かれた。

ああ、こうなるんだ。話には聞いていたけれど、宇宙鼻が分裂する瞬間を見るのは初めてだった。何でも、経験するのは面白いもんだ。デパチカに帰ったら、みんなに話をしてやろう。だが、待てよ。それまで、俺は生きていられるのか。

分裂した鼻は部長の鼻にそっくりであった。もちろん、普段から、鼻は自分の顔に着いているので、覚えてはいないけれど、噂では、鼻は本体の人間とそっくりらしいので、そっくりなのだろう。どう見ても、あまりかっこいい鼻ではない。左右の鼻の穴の大きさは違うし、微妙だが、左右非対称だ。誰かに殴られて鼻が歪んだわけではない。それならば、生まれつき歪んでいるのか。そう言えば、何か考え事をするたびに、鼻をつまんで二、三回動かす癖がある。

以前、部下に、「部長、何かいい考えが浮かんだのですか」と尋ねられ、「いや、別に。どうして、そんなこと聞くんだ」と尋ねたら、「いやあ。部長が考え事をして、何かをしゃべり出す時の前に、必ず、鼻をつまむんですよ」と指摘されたことがある。鼻つまみ者とは、いい意味ではないけれど、鼻をつまんで、素晴らしいアイデアが出るのも面白い癖だ、自分ながらにそう思う。

そんなことはどうでもいい。問題は、眼の前の宇宙鼻であり、その宇宙鼻に臭われた自分の行く末、未来だ。どうせなら、自分の鼻にそっくりの宇宙鼻の写真を撮影し、神棚に飾った方がいい。部長は、再び、カメラを取り出し、生まれたばかりの宇宙鼻にカメラを向けた。だが、宇宙鼻たちは、部長にはもう用済みなのか、お時儀もせずに、次の獲物を探し求めて、飛び去った。茫然と立ち尽くしたままの部長。

だが、部長は、気を取り直し、デパ地下に戻ると、宇宙鼻の写真を印刷し、商売繁盛を祈願して、神棚に飾った。そして、部長は、デパチカの聴衆の前で地上での武勇伝を熱く語り始めた。終わった後、聴衆から拍手。それほどまでに、人々のことを考えてくれていたのかと感動された。また、部長の身の上を心配する者もいた。

それから一日が立ち、二日が立ち、三日が経った。部長は、相変わらず、商売繁盛で、デパチカの中を忙しく動き回っていた。その様子を見た人の中には、宇宙鼻に鼻を模倣されると死ぬという噂は嘘じゃないかと疑うものが現れた。その男は、デパチカを出て、地上の生活に戻った。宇宙鼻に自分の鼻をコピーされることはあっても、健康に異常はなかった。この話は、デパチカ滞在者に一挙に広がった。

宇宙鼻に臭われることは気持ち悪いけれど、臭われても別に何かが減るもんじゃないし、命に別条がなければ地上で生活してもいいんじゃないか。いつまでもデパチカで生活するわけにはいかない。蓄えも急速に減って来た。他人に気兼ねして暮らすよりも、やっぱり、自宅で生活するほうがいい。

そうした考えを持った人々は、デパチカを離れ、元の生活に戻っていった。やがて、デパチカに買い物に来る人はいても、住み続ける人々はいなくなり、売り上げは元に戻った。部長の忙しさも元に戻った。部長は後悔した。命を懸けて取り組んだことが、かえって、自分にとってはマイナスになるとは。ただし、プラスになることもあった。人々が地上に戻ったお陰で、宇宙鼻は次々と街の人々をコピーして、増殖していった。全ての人々の鼻をコピーし終わると、一斉に空高く飛び去った。

宇宙鼻が飛び去った後、街の人々の生活は、宇宙鼻がいた時と同じように、時計の針の回転に合わせて暮らして行った。



### 三 宇宙口がやってきた。やあ、やあ、やあ。

---

白い入道雲とその雲を吹き飛ばす青い風が交互に現れるたびに、季節は夏から秋へと変わった。

一人の若者がビルから出てきた。背広を着こなし、髪は短い。「それじゃあ、よろしくお願ひします」と笑顔であいさつし、頭を下げた後、踵を返し、ビルに背中を向けた。その途端、顔は見る見るうちに、笑顔からしかめっ面が変わった。眼は吊り上がり、鼻の穴は開き、口は尖り、耳は真っ赤に変わった。まるで大魔神だ。尖った口先から怒りが飛び出した。

「くそっ。何だ、あの態度は。人を人として見ていないのか。上から目線で見やがって」

若者は、無職だった。失業中だった。ハローワークにて、仕事先を紹介してもらい、会社の面接を受けた。だが、面接会場では、面接官からは適当にあしらわれ、とてもじゃないけれど、採用の見込みは期待できなかった。人を馬鹿にしたような質問に対しても、就職したかったので、何とか我慢したものの、怒りは頂点に達していた。それが、今、爆発している。

若者の口からは、機関銃のように罵声が発射されている。横を通り過ぎた人々は、眼を丸くして若者の後ろ姿を見つめるが、若者は意に介さない。反対側から来る者は、口撃を恐れてか、道を避ける。若者の前に未知だけが広がる。就職は決まらないものの、見えない我が道だけは切り開かれていく。何かを失えば、何かを得る。人生とは得てして、こういうものだ。

向こう側から来る人を気にせず突き進む若者だったが、さすがに横断歩道の前では立ち止まった。信号は赤。左右には車が行き交う。人生に自暴自棄になっても命は失いたくはない。このまま飛び込むつもりはない。足が止まっているうちに、次第に激高した感情も収まってきた。

だが、信号は変わらない。いつまで待たせる気だ。世界の中心で、怒りを飛ばす若者にとって、他人から命令や指示を受けることは耐えられないことなのだ。隙があれば、横断歩道を渡ってやろうと思いつつも、この前面道路は、この街で一番交通量の多い中央道路。六車線あり、車は切れ目なく常に行き交っている。一瞬でも空白の時間帯はない。若者が渡る決定的瞬間はないのだ。若者は、いらつきながらも、信号の色が変わるのを待っている。

若者はじっとしてられず、視線をあちらこちらに飛ばしながら、もうそろそろ信号が変わるだろうと、再び、眼を信号機に戻した。まだ、赤だ。「ちえ」舌打ちする音。そのとき、若者の視野に信号機以外の物体が乱入した。「何だ、あれは」思わず声が大きくなった。若者の隣に並んで、信号が変わるのを待っていたOLが、その声に驚き、若者の側から離れた。ここでもまた、若者は半径一メートルの空間を保つことができた。

若者は、他人から敬遠されているという状況を気にせず、信号機の上の物体に視線が釘付けになった。その物体が、若者の声に引き寄せられたのか、空中を浮遊しながら、近づいてくる。若者は、へびににらまれたカエルじゃないが、じっとしたまま動かない。若者には、興味、関心があるのか。それとも、怒りの対象をみつけたのか、相変わらず、横断歩道の前で、根っこが生えたように、立ち尽くしたままだ。

行くあてのない若者にとって、ここが自分の居場所だと勘違いしたのだろうか。信号が青になった。信号で釘づけになっていた人々は、川の流れをせき止める石のように動かない若者を避け

、次々と横断歩道を渡っていく。だが、若者は渡らない。若者の前には、物体が、距離にして、手の幅二つ分、つまり五十センチ、いや四十五センチ、いや、四十二センチ、浮遊している。

今、はっきりとわかった。眼の前の物体は、口だった。上唇と下唇が仲良くひっついていて、いや、仲が良いかどうかはわからない。兎に角、閉ざされた唇。口だけが存在するなんてありえるのか。だが、待てよ。以前、この街には宇宙眼と宇宙鼻が来襲したことがあった。ひょっとしたら、眼の前の口も、同じ仲間か。それなら、宇宙口だ。

「お前は誰だ」若者は思わず叫んだ。宙に浮かぶ口が、ゆっくりと唇を動かした。

「お・ま・え・は・だ・れ・だ」

宇宙口が若者の言葉を繰り返した。

「真似をするな」

若者が叫ぶ、

「ま・ね・を・す・る・な」

宇宙口が真似をする。

「いいかげんにしろ」

若者は怒って、宇宙口から顔を背けた。信号は青だ。今の間だ。若者はさっさと横断歩道を渡ってしまった。後に残された宇宙口。「い・い・か・げ・ん・に・し・ろ」と呟いた後、形が変形すると、二つに分離した。二つになった宇宙口は、眼にはさやかに見えない風に乗って、声のする方向へ、口をパクパクさせながら、それぞれ別方向に飛んでいった。

ここは、ラジオのスタジオ。スタジオといっても、防音室の中に、机があり、その上にマイクがひとつ置いてあるだけだ。スタジオの外で、山崎さん、通称山ちゃんから本番五分前と書いた紙が提示された。山ちゃんとはこれまでこの番組が始まって以来の仕事仲間だ。しゃべらなくても、眼で合図すれば、仕事の段取りはつく。

「ふう」美紀は大きく息を吐いた。いつも、本番前には、深呼吸をするのが習慣だった。眼を閉じる。スタジオ内で、耳を集中させる。今は、全国放送のキー局の番組が終わり、つなぎの音楽が流れている。何も見えない。いや、空調から流れる空気の美妙的な風が美紀の頬をかすめる。眼を見開いた。準備万端だ。窓の外で、山ちゃんの右手の指が一本ずつ折れて行く。五、四、三、二、一。レバーを上げた。これで、ラジオに音が流れる。街中に美紀の声が電波となって届くのだ。

「はい、みなさん。こんにちは。羽音美紀です。街の情報番組ハートフル高松が始まりました。季節は、今、まさに、スポーツに、読書に、芸術に、そして、わたしの大好きな食欲の秋で真っ盛りです。これから三十分間、どうぞ、番組をお楽しみください」

ここで、山ちゃんからキューが入る。レバーを戻す。バックで音楽が流れる。山ちゃんが右手でOKの合図をしてくれた。これで落ち着いた。この仕事は何年間もやっているが、最初の一言の入りで番組が上手くいくかが決まる。最初の、「は」の音をはっきりといえているのかどうか、声のトーンはいいのか、声の大きさはいいのか。自分の声なのに、自分で常に上手く調整が出来ないのは不思議だ。

しかし、自分の声だからこそ自分の体と話し合う必要があるのだろう。毎朝、起床時には、うがいはかかさない。外から帰ってもうがいはする。食事は、あまり刺激のある物は摂らない。アルコールの飲み過ぎには気をつける。カラオケに行っても、喉で歌うのではなく、腹から声をだす。お風呂に入れば、体を滑らせ、喉まで湯に浸かり、温める。寝る前には、うがいをする。何の根拠もないようだけど、自分にとっては、喉と対話のひとつだ。喉をいたわる気持ちがあれば、喉も美紀の期待に応えてくれる。

山ちゃんからOKが出た。自分も今日の出だしはよかったと思う。後は、リスナーが眼の前に座っているように、どう会話するかだ。そう、あくまでも、眼の前に座っているかのようである。何回か、公開生中継でラジオ番組をやったことがあるが、この商売をしているけれど、いざ、眼の前に人がいると、上がってしまう。喉が上がるんじゃない。眼が上がる。視線が上を向くと、声も上ずり、頬が真っ赤になる。そして、頭の中が真っ白になり、番組は黄信号が点滅しだす。様々な色が楽しめていいじゃないかと思うけれど、美紀はマイクの前に立ち尽くすカメレオンじゃない。ラジオのパーソナリティだ。プロのアナウンサーだ。

意識しなければいいじゃないかと、山ちゃんに言われるけれど、人間は、意識すると言われてれば、意識するなということに意識してしまい、結果的に、頭の中がパニックになってしまうものなのだ。

今日は大丈夫。上手くいく。そう、思い込む。さあ、この音楽が終わったら、本番開始だ。打ち合わせどおり、最初は、リスナーからのメールの紹介だ。打ちだされた紙を見る。ペンネームは、おや、メールネームは、わちにんこ、さん。この番組の常連さんだ。ガラスの外で山ちゃんがキューを出した。さあ、声を出すぞ。その時、山ちゃんの肩越しに何かが見えた。気にせず、わちにんこさんのメールを読む。

「いつも、会社でこの番組を聞いています」

だが、やはり気になって、文章を読みながら、眼を上げる。ガラスには口がいた。見間違いだろう。まばたきをした。やはり口だ。口が動いている。冗談か。山ちゃんのいたずらか。天狗の蓑笠を被れば、透明になれる昔話を讀んだことがある。その現代版か。だが、それはあくまでもお伽話だ。それとも、山ちゃんが体中に透明になるお経か何かを書き、口だけを書き忘れたのか。それも、作り話だ。

美紀は、なんて馬鹿な事と考へながらも、とりあえずは、プロのアナウンサーだ。意識の八割、いや九割以上は、窓の外の浮かぶ口に心を奪われながらも、残りの一割の意識で、視聴者からのメールを一枚読み切った。外にいる、山ちゃんに大きく手を振って、「ここでもう一曲音楽を聞いてください」と言って、自分の声がラジオに流れないように、スイッチを切った。

山ちゃんは、美紀の急な行動に対しても、慌てることなく、前倒しで、音楽を流してくれた。そして、「美紀どうした？トイレか？」と外から声を掛けてきた。美紀は外に通じるマイクから答えた。

「口が、口が浮いているの」

美紀の眼の前のガラスの外には、今も、口が漂っている。

「えっ、なんだって」

山ちゃんは、美紀の声がよく耳に聞えなかったのか、それとも美紀の言っていることが頭で理解できなかったのか、聞き直してきた。美紀はひと差し指で、浮遊する口を指し示した。山ちゃんは、美紀の指先から出ている赤い糸、いや、そんな物は出ない、指先からの見えない点線を辿って、視線を動かした。ちょうど、山ちゃんの左耳の横に、浮遊する口がいた。山ちゃんはその口を自分の眼を大きくして確認した。山ちゃんの開いた口は塞がらなかった。その塞がらない口から言葉が発せられた。

「お前は誰だ」

ある一定の時間の間を置いて、山ちゃんが叫んだ。その間が、一秒なのか、三秒なのか、五秒なのか、わからない。この業界で、間ほど恐ろしいものはない。例えば、インタビューで、相手からの返事が直ぐにない場合、どうしようかと思うことがある。テレビでは、考えている相手の顔の表情も写しているのだから、情報が伝えられ、間がもつけれど、ラジオでは、空白の時間しかない。視聴者からは、ラジオが流れていないのかと錯覚し、苦情の電話がかかることさえある。そんなことがないように、こちらが助け船を出し、相手の答えを引き出したり、全く、別の話題に変えたりしなければならない。

だから、美紀は、間には非常に敏感だ。もし、万が一、三十秒でも間が空けば、つまり、音が聞えない時間があれば、そのアナウンサーは失格であり、クビである。たかが、三十秒でもだ。三十秒ぐらいならば、日常生活でしゃべらないことなんてよくある。仕事が終わって、家に帰っても、夫としゃべらないことはよくある。いや、これは、別の問題か。兎に角、この業界では、三十秒の空白の時間が命取りになるのだ。

美紀は思う。人間の一生のうち、人がしゃべる量、時間は決まっているんじゃないか。また、そんなにしゃべってどうするんだ、という思いもある。事実、自宅に帰れば、用が無ければ、家族と会話することはない。でも、今はそんなことはいい。問題は、眼の前の浮遊する口だ。

山ちゃんが叫んだ「お前は誰だ」という発言は、よく考えれば、馬鹿な質問だ。口である。口に向かって、誰だと聞くのだから。口は口であって、口以上のものではない。

その口が、一秒の間を置いて、答えた。

「お・ま・え・は・だ・れ・だ」

これも馬鹿な返答だ。お互い初対面なのだから、誰だか知らないのは当たり前だ。他に言いようがないのか。こうしたオウム返しは、この業界では、芸がない、洒落っ気がない、知性のかけらも見られないと悪態をつかれ、業界追放の憂き眼に合う。もちろん、この浮遊する口は、美紀たちの業界の人間？ではない。突然の来訪者である。招いてはいない、招かねざる客なのだ。お断りの客なのだ。

「お前こそ誰だ」

山ちゃんが怒声を発する。この質問も、美紀から言えば、芸がない。誰だ、誰だでは、話が前に進まない。例えば、高松放送局のラジオディレクターの山崎健吾です。あなたのお名前はわかりませんが、例えば、浮遊する口さんとお呼びしますが、何の用で、この放送局にお越しいただいたのでしょうか。もし、羽音美紀にお会いに来られたのだとしても、あいにく、今は生放送中で、対応できません。公開放送の際に、是非、お越しください、とでも言えばいいのに。

多分、百戦錬磨の山ちゃんといえども、今は、業界人であることを忘れ、普通のおじさん、一般人に戻っているのであろう。美紀も同情する。自分も、口が浮いているのを見て、慌ててラジオの放送をやめ、山ちゃんに助け船を出したのだから。

慌てふためいている、普段見慣れない山ちゃんの動揺ぶりが妙に可笑しい。笑うことは、冷静になれる特效薬なのかもしれない。

美紀は笑うことで客観的に、山ちゃんと浮遊する口の対峙を見ていた。その時、思い出した。以前、この街に宇宙眼と宇宙鼻がやってきたことを。今、眼の前にいる口は、あの宇宙眼と宇宙鼻の仲間じゃないのか。笑うことで、以前経験した情報に結びついた。

自分の代わりに宇宙鼻に対応している山ちゃんを助けないと。美紀はマイクを掴んだ。そして大声で叫んだ。

「山ちゃん、そいつは宇宙口よ。気を付けて」

まだ、ラジオでは音楽が流れている。美紀の声は山ちゃんに届いた。もちろん、宇宙口にも。一秒後には、

「や・ま・ち・ゃ・ん、そ・い・つ・は・う・ち・ゅ・う・く・ち・よ」と、お返しの言葉があった。

しまった。美紀はしゃべるんじゃなかったと後悔した。山ちゃんが、口にひとさし指を当て、しーとしている。つまり、しゃべるなということだ。

後悔とは後から悔むこと。悔やんでも仕方がない。宇宙口は、山ちゃんの「お前誰だ」の声を聞いて、二つに分裂した。分裂した先は、山ちゃんの口にそっくりの口だった。出産おめでとう。出産祝いに何がいい。まだ赤ちゃんの口だから、よだれ掛けがいいかな、なんて思わずジョークを言いたくなる。だけど、元の宇宙口が、今、先ほど、出産？分裂したばかりなのに、美紀の「山ちゃん、そいつは宇宙口よ。気を付けて」の声を聞くと、再び、出産？分裂した。そのコピーされた口は、美紀の口そっくりだった。

美紀はそのコピーされた宇宙口を見て、先ほどは、山ちゃんそっくりの宇宙口だと断言できたが、いざ、自分の口のコピーを見ると、少し、違うんじゃないか、いや、全く、似ていない。自分の口の方がもっと可愛いはずだ、と断言した。人間とは、勝手なものである。

さて、ラジオ放送局に現れた宇宙口は、ディレクターやアナウンサーを始め、ラジオ局全員の口をコピーすると、建物から出て行った。

残された美紀と山ちゃんとラジオ局職員。美紀の声が流れなかったとしても、視聴者および自分たちのリクエスト曲を数曲つなぎ、一秒たりとも空白の時間を作ることなく、ラジオ放送を継続した。さすが、プロ集団である。いかなる支障、障壁、災害、困難があろうとも、自らの仕事を完遂するのであった。

こうして、街中に宇宙口が徘徊し、街中の人々の口をコピーし終えた。最初は、むやみに恐れた街の人々だが、宇宙口が、ただ単に、自分の口をコピーするだけで、危害を加える恐れがないと確信すると、宇宙口の眼の前で、平気でしゃべった。逆に、自分の存在感がない人は、自己を認めてもらえる最大のチャンスだと思い込み、あちこちの宇宙口の前でしゃべり続けたものの、宇宙口には総背番号制があり、登録されているのか、決して、同じ人間の口はコピーされな

った。まさに、一期一会であり、これから冬にかけては、いちごの季節である。いちごの美味しさを味わうように、人生を楽しみたいものだ。

#### 四 宇宙耳がやってきた。やあ、やあ、やあ。

色づいた木々の葉が落ち、通りの木々は裸にさらされた。そう、季節は、秋から冬になったのだ。あれほど街にうごめいていた宇宙口は、街の人々にとって、うっとおしく、眼障りな存在であったが、いなくなると案外寂しい気持ちになるものだ。人は、勝手な感情の生き物である。寂しさをまぎらわす訳ではないけれど、街の人々は、寒さのため服を重ね着した。ビジネスマンはコートのえりを立て、高校生たちはマフラーを首に巻いた。マフラーを巻いている人の内、喉が弱い人は、顔半分をマフラーで隠して、歩きながら、半冬眠状態になった。

猫がこたつで丸くなるように、人々も背を丸め、猫背となり、体から熱をのがさないようにした。そのため、眼は細め、鼻の穴はすぼめ、口は閉じた。だが、顔の感覚器官で、耳だけはどうにもならない。以前、テレビ番組のびっくりショーで、耳を動かす人が出演したのを観たことがあるが、耳の穴まではすぼめることはできない。ピューピューとした北風が耳の洞窟に吹き込み、より一層がなり音を立てる。可哀そうな耳。さて、今回は、この耳が主役である。

「ほんまに、寒いわ」

高校生の川口豊は、体を震わせた。学生服の下には、セーターを着込み、手には手袋を、首にはマフラーをしている。だが、自転車のため、風がまともに当たり、寒さが学生服を簡単にすり抜け、セーターの防護壁も突破し、長袖のシャツも、Tシャツもものともせず、豊の皮膚を突き刺す。体中をしばかれた豊は、鳥肌を立てて防戦するのが精いっぱいである。こうした体の中での戦いを、豊の脳が認識しないわけではない。「ほんまに、寒いわ」、と喉から言葉を発させ、少しでも、体を温めようとするものの、所詮、口だけである。いや、空元気の源にならないこともないことはない。一体、どっちだ。はっきりしろ。

豊はブレーキを握りしめた。キキキキキ。ギギギギギ。前輪と後輪からタイヤを締める音が聞こえた。だが、自転車はストップラインをタイヤひとつ分通り過ぎて、止まった。あやうく道路に飛び出そうになった。スピードを出し過ぎていたのとブレーキの効きが甘いせいだ。だいぶガタがきているな。豊は、サドルに座ったまま、前輪と後輪のブレーキのゴムパッドを見た。自転車の全体も見回した。学校信号が終わったら、近くの自転車に寄って、修繕してもらおう。豊は、視線を顔の前面の位置に戻し、更に、上にあげ、信号機を見た。

中央通りの真ん中の分離帯にはクスノキが植えられており、冬だが葉を茂らせている。しかし、歩道に植えられた木は、すでに葉を落とし、丸裸状態だ。思わず、寒いだろう、と声を掛けたくなる。この寒さにも耐えられる樹木の表皮なのか。俺も寒い。豊は身を引き締めた。

「まだかよ」思わずタメ口を吐く。学校まで自転車を飛ばせば五分で行ける。それに、息が上がるくらいペダルを漕げば、体が温まる。だが、このまま、後、三十秒じっと待っていたら、歩道の並木と一緒に、固まったまま動けなくなりそうだ。次に動き出せるのは、春の到来だ。それも、面白いかも。つまらない学校に行くよりは、並木と一緒に、自転車ごと、街の風景になるのもいいかも。そう、眼の前の信号機のように。

豊は、さっさと変われと呟く。信号機を睨みつける。その睨みつけた眼に、何かが映った。信号機じゃない物。信号機のおまけか。まさか。そのおまけがゆっくりと宙に舞いながら豊に近づ

いてくる。「なんだ、ありゃあ」

ちょうちょうか？羽根がふたつある。その羽根をゆっくりとゆらしている。スピードはゆっくりだ。時折吹く北風に煽られて、まっすぐは飛べずにふらついている。宙に絵を描くように漂っている。だが、着実に、豊に近づいてくる。現代美術作品のように、固まってしまった豊。そんな豊を尻眼に、人々は、青信号の横断歩道を渡っていく。

豊の頭の中は、今は、眼の前の浮遊する物体と同様に浮遊している。学校の始業時間のことは頭の隅にない。全感覚器官が、今は、ちょうちょうもどきに対峙している。敵は一体、何者なのだ。

風変りなちょうちょうは、ひらひらと豊の前を飛ぶ。こんなちょうちょうは見たことがない。豊は子どもの頃を思い出した。保育所の年長や小学生の低学年の頃だ。近所に住む父親の父親、つまり、じいちゃんに虫取り網と虫のかごを買ってもらった。豊にとって、手や足など、自分の体以外の道具をもつことは、新鮮であった。自分が成長したような気がした。届かない物が届く。捕まえられない物が捕まえられる。つまり、獲得できる範囲が広がったのだ。捕まえた物が保管できる。つまり、貯金できることを知ったのだ。この網とかごを持つことで、豊は、世界を征服できるんじゃないか、とまで思えた。

豊は、この世界征服道具を身に付けると、家の庭に出た。庭には、黄色の花が咲いている。花の名前は知らない。その花の蜜を求めて、虫がやってくる。みつばちに、ちょうちょうだ。豊は、世界征服の手初めに、ちょうちょうを捕まえることにした。網を手を持った。自分の手が伸びた網だが、手が伸びた分、すぐには動かない。反応が遅れる。ちょうちょうは、捕まえられるとも露とも知れず、花の露のような蜜を吸っている。

今だ。豊は、地面に着いている網を持ち上げた。だが、手が伸びた分、自分の意思が、網の先端まで届くのには時間差が生じる。心では既に、ちょうちょうを捕まえたはずだが、現実の網は、花をすっぽり覆うだけであった。ちょうちょうは、網をひらりとかわすと、隣の花の蜜を吸っている。再度、自分の出来る限りの力を使い、すばやく網を持ち上げ、ちょうちょうを花と一緒に捕獲しようとする。だが、ちょうちょうは、再び、網から逃れ、今度は、隣の家庭に咲いている花に飛んで行った。

網を持ったまま、茫然と立ち尽くす豊。網の中では、豊の力が強すぎて、花びらは全部散り、茎が真ん中当たりから折れてしまった。うなだれた花。うなだれる豊。

豊は、結局、ちょうちょうの捕獲はできず、花の破壊だけが行われた結果となった。初めての豊の世界征服の夢は破れた。この日以来、豊は、ちょうちょうを捕まえることをやめた。世界は征服するものではなく、共存するものであること、制服という野心が世界を破壊してしまうことを、身を持って知ったからだ。

今、豊の眼の前でひらひらと飛んでいるちょうちょうは、あの時のちょうちょうではない。だけど、あの時、ちょうちょうを捕まえていたら、今の自分ではない、自分であったかも知れない、と豊は思う。ちょうちょうを掴まえてみたい。ちょうちょうを捕まえれば、今からの未来が、大きく変わる、変えられるような気がした。だが、捕まえた後、どうするのだ、カバンの中にも入れるのか、カバンに入れたら死んでしまわないか。躊躇する豊。



豊は、もう一度、ちょうちょうを見た。浮遊物体を凝視すると、ちょうちょうであって、ちょうちょうじゃない。べんべん。それは何かと確かめれば、耳だ。耳だ。耳が、両耳がくつついて、お金がたまる下ぶくれの耳たぶを震わせながら、宙に浮かんでいる。いや、飛んでいる。

豊は自分の右の耳たぶを掴んだ。ちゃんとある。左の耳たぶも掴む。ちゃんとある。寒風に吹きさらされ、尖端が冷えて感触がなくなりそうな指先に、ほんわかとした温もりが伝わる。生きている。俺は、生きている。豊は自分の命を確認した。普段、耳なんて、存在の意識には上がって来ない。音が聞えているか、声が聞えているかどうか、いや、もっと原初的に、音が大きいとか、小さいとか、聞こえやすいとか、聞こえにくいとかは意識するものの、耳があるかどうかなんては意識しない。

朝、眼覚めて、顔を洗い、鏡を見ても、眼やにがついていないとか、鼻毛がのびていないとか、口に涎がついていないかだとか、髪の毛が鉄腕アトムのようになっていないかとか、皮膚の毛穴が開いて汗が噴き出していないかどうか、気を配るものの、耳から毛が生え出していないとか、耳くそが転がり落ちていないとか、今日は耳たぶが真っ赤で健康的だとかは確認しない。そう言う意味で言えば、耳は顔の感覚器官でありながら、無視された存在なのだ。

豊は、浮遊する耳もどきの、いや、ちょうちょうもどきの存在を眼にしてから、一瞬で、様々なことを思い浮かんだ。この思い浮かびが、今後、役立つかどうかはわからない。

豊が、一瞬、押し黙ったので、豊の声に魅かれてやってきた、耳もどきも、ゆっくりと耳たぶを羽ばたかせながら、豊の目の前でホバリングしている。

「何あれ、変なの、ちょうちょうかしら」

「ええっ。今は冬よ」「耳みたい」

「耳チョウチョウかしら」

「そんな、ちょうちょういるの？」

「そんなの知らないわ。でも、眼の前にいるわ」

豊と浮遊物体の様子を見て、通りすがりの人々が、小声でささやいている。浮遊物体は、その囁きを耳にすると、声のする方向に近づいていこうとする。

「宇宙耳だ」

豊が思わず叫んだ。この街には、これまで、宇宙眼や、宇宙鼻、宇宙口がやってきた。宇宙耳がいても可笑しくない。それに順番から言えば（何の順番かは分からないけれど）宇宙耳が来ても不思議じゃない。

豊の声を聞き、宇宙耳が空中停止した。そして、再び、豊の顔の前に戻って来て、ホバリングした。

「お前、宇宙耳か」

豊が尋ねた。その時だ。宇宙耳が二つに分かれた。一つは、元の宇宙耳。もう一つは、豊の耳にそっくりの耳。豊は思わず自分の耳を触った。大丈夫。ちゃんとある。切り取られていない。じゃあ、眼の前のもう一つの耳は誰の耳？犬の耳でも、猫の耳でも、ロボの耳でも、王様の耳でもない。じゃあ、誰の耳？俺の耳か？

豊は、ポケットから携帯電話を取り出し、撮影モードに切り替えると、自分の顔を撮影した。

急いで、撮影した写真を確認する。

「まさか」

豊の眼の前で分裂した宇宙耳と写真の自分の耳とを比べようとしたけれど、既に、宇宙耳は豊の前から消えていた。

「まあ、いいか」

自分の耳がコピーされたからと言って、命を削られたわけでも、金を盗られたわけでもない。著作権上の問題はあるけれど、写真を撮影されたと思えば、納得がいく。

「しまった。授業が始まっているぞ」

豊は、携帯電話のデジタル数字が8 : 30を示しているのに気づくと、携帯電話をポケットに滑り込ませ、チャリンコを全速力で漕ぎだした。

その間にも、宇宙耳は、通りゆく人や信号で止まっている車に近づいたり、コンビニ、オフィスの中に入って行き、「きゃあ、何」「気持ちわるー」の声を聞き付け、耳をコピーし、分裂し始めた。

某国営放送の六時十分からの夕潮どき高松の番組で、宇宙耳が来襲し、人々の耳がコピーされているとのニュースが放映されていた。宇宙眼がやって来て、宇宙鼻がやってきて、宇宙口がやってきて、宇宙耳がやってきた。宇宙に詳しい学者や軍事評論家、生物に詳しい学者たちが、テレビ討論をしていた。

次は、宇宙髪がやってくるのではないか、いや、宇宙手だ。ひょっとしたら、宇宙足じゃないか、様々な憶測が乱れ飛んだ。コピーするのは何故か、という議論もあった。宇宙〇〇の目的は何か。宇宙手に手を握られたら、コピーされるのではないか。宇宙足に足跡を踏まれたら、コピーされるのではないか。でも、コピーされても、オリジナルには全く影響がないことは、これまでの経験から明らかだった。

テレビのスタジオでは、終わりのない、また、答えのない、また、答えがないことを目的とするような、激論が交わされており、家庭では、全員が居間に集まり、みかんを食べながら家、その番組を興味深そうに視聴していた。

家族は久しぶりの団欒を迎えることが出来た。そう、危機に面すれば、人々は絆を求めて、集い集まるのだ。あちらこちらの家では、家族会議が開かれた。会議と言っても、この番組を見ながら、宇宙耳に何もしない行政や警察に対する不満を口にしたり、何の根拠もなく、大丈夫だ、大丈夫だ、とお経のように念じたり、宇宙耳がアイドルや俳優のコピーした耳を自分の耳と交換したいと願う人や、そのコピー機能を活用し、ひと儲けを企む者もいた。その家族会議に、宇宙耳はノックもせずにおじゃまして、だべり続ける人々の声をコピーし続けた。

番組が放送されると、人々は、テレビに夢中になった。この番組を企画したディレクターは、思わず、やったあ、と手をたたいた。視聴率が、うなぎ登りを通り過ぎ、屋根より高い鯉のぼりのレベルにまで達したからだ。統計上言えば、この街の全ての世帯が、宇宙耳特集を視聴していることが推測される、視聴率はほぼ百パーセントを示した。

ガッツポーズのディレクターを始め、カメラマンも、上司のプロデューサーも、脚本家も、みんな、にこにこしている。まさに快挙だ。その現場中継にも、宇宙耳がやってきて、ディレクタ

一を始め、激論を交わしている出演者たちの声を聞き、コピーして、分裂した。

テレビ番組が終わる頃には、宇宙耳は街の全ての人の耳をコピーし、街中をふわりふわりとどこかに落ち着き場所がないかと、夢心地で浮かんでいた。いくら元気な宇宙耳（宇宙耳が元気かどうかはわからないけれど）でも、一日中、コピーする人々を求めて、街中を彷徨っていたのだから、休息は必要である。それに、今は夜である。冬の寒さは厳しい。耳だけに凍傷のおそれもある。

宇宙耳たちは、ねぐらを求めて、中央通りのクスノキの並木の枝で羽根（？）を休めようとした。だが、そこは、ムクドリたちのねぐらである。突然の訪問者に、ムクドリたちは過激に反応した。自慢の嘴で、宇宙耳たちをつついた。宇宙耳たちに抵抗する術はない。話し合おうにも、お互いの意思は通じなかった。共存は無理だった。これまで、街の人々の耳をコピーしても、人間からは何の攻撃も受けなかったし、どちらかと言えば、人間の方が逃げてくれた。それなのに、ムクドリたちは有無を言わず、攻撃してきた。勝手が違う。宇宙耳の辞書には掲載されていない事柄であった。あわてふためく宇宙耳たち。

宇宙耳の中には、耳の穴から血を流し、地上に落下する者が多数でた。これではいけない、全滅させられると思ったのか、一番最初にこの街を訪れた宇宙耳がクスノキから飛び去ると、他の宇宙耳たちも、一斉に木から逃げ出した。だが、宇宙耳たちは、誰も行き先は知らなかった。誰かに着いていけば何とかかなると思っていた。いや、そこまでは考えていない。ムクドリからの嘴攻撃に恐れをなして、ただ、単にその場から逃げ出したかっただけなのである。先の見通しなんて、先に飛び立ったリーダー以外、他の誰も考えてはいない。いや、リーダーも、今ある目の前の耳たちの危機から逃れただけであった。将来を見通した行動ではなかった。

宇宙耳たちは、この街の夜空一面に浮かぶと、宇宙の彼方から聞える音を求めて、一斉に、飛んで行った。

## 五 宇宙顔がやってきた。やあ、やあ、やあ。

---

宇宙耳がこの街から消えた後、街は、雪や氷が解け、どんよりとした灰色からさくら色など心が浮き立つ華やかな色に変わりつつあった。冬が去り、春の到来だ。中央通りの歩道の桜並木はつぼみが開き、花が満開となった。人々は春の陽気に浮かれてか、街に繰り出し、街は活気に満ち溢れた。

ある日のことだ。昼間にも関わらず、空が急に暗くなった。光が何かに覆われたのだ。日食か？そんな情報は、天気予報では流れていなかった。人々は不安に襲われた。

「あれは、なんだ」

「わんわん」

「みゃー」

「きゅるきゅる」

人間を始め、犬、猫、ムクドリなど、街の全ての生き物が空を見上げた。空に、何かが浮遊している。眼を凝らして見た。

「眼だ」

「鼻だ」

「口だ」

「耳だ」

だが、顔はない。それぞれが、眼は眼、鼻は鼻、口は口、耳は耳で大挙して群れをなしている。宇宙眼、宇宙鼻、宇宙口、宇宙耳たちが再び街に戻ってきたのだ。人々は口をぽかんと開け、空を見上げたままだ。花見帰りの客は、千鳥足のまま、空を見上げ、まだ酔いの最中なのかと、何回も眼をこすっている。

「ひゃあ」

人々は眼をつぶった。頭を下げ、体をくの字に折り畳んだ。強い春風が吹いた。中央通りには、花びらが散り舞う。再び、人々が顔を上げた時、空の浮かんだ宇宙眼たちは、体型を変えていた。それぞれの眼、鼻、口、耳が、輪郭はないものの、一組の顔となって、空に浮かんでいる。花火のように美しくはない。どちらかと言えば、不気味だ。空に浮かんだそれぞれの顔の口がにやっと、街の人々にはにやっと見えたが、本当に、にやっと笑ったのかどうかはわからないが、とにかくにやっとした動きをすると、ゆっくりと地上に降りて来た。

街の人々は、ビルの中から、学校の教室から、道路から、この光景を固唾を飲んで眺めたままだ。宇宙眼たちは、眼で探し、鼻で臭い、耳で声を聞き、自分のオリジナルの眼や鼻や口や耳を見つけると、その面前に浮かんだ。じっと対峙するオリジナルとコピー。コピーの口が再び、にやっと笑うと、コピーたちはオリジナルの顔に張り付き、オリジナルの眼、鼻、口、耳と入れ替わった。

自分の顔から追い出された眼、鼻、口、耳は、宙にふわふわと漂った。もう、元の顔には戻れない。しかし、どこかに、落ち着き場所がある。眼や鼻、口、耳たちは、一斉に空高く舞い上がり、新たな故郷を求めて、どこかの星の、顔のある生物を求めて旅立った。